

## ニュース番組における解説機能の役割

～キャスター・コメンテーターのディスコース分析を中心に～

博士後期課程 鄭 玫秀  
博士後期課程 戸田里和  
博士後期課程 国枝智樹

### 1. 問題の所在と研究目的

近年、タレントや作家、弁護士といった人物がテレビで時事ニュースについて自らの考えや思いを語る光景は珍しくない。1974年に放送を開始したNHKの「ニュースセンター 9時」以後、キャスターがニュースについて自らの意見を述べる番組は増加している。そして今日では、キャスターに留まらずコメンテーターと呼ばれる、多くの場合テレビ局とは別組織に所属する人物もニュースについて自らの意見を述べる時代となった。

従来、ニュース研究においてコメンテーターは注目されてこなかった。そもそもニュースを伝えているのはキャスターやアナウンサーであり、コメンテーターはあくまでも伝えられたニュースについて語る、いわば副次的な役割に留まり、発言する機会も少なかったからである（萩原滋、2001：95）。様々な背景を持つコメンテーターがニュースについて語る機会が増えているのであれば、その役割、その機能とは何か。コメンテーターらはニュースについて解説することで社会の公的な争点を個人に還元する役割をはたしているのだろうか。また、多様なコメンテーターがニュースについて語ることによって、視聴者は多様な視点を提供されているのだろうか。それとも逆に、専門的知識の無いコメンテーターらがニュースについて語ることで誤解を招いたり、偏狭な意見を述べることで視野を狭めてしまったりするのだろうか。

本研究では、まずコメンテーターの実態を調査し現状を把握する。次にニュース番組におけるコメンテーターの発話に着目し、その役割を明らかに

---

(※) 本研究は、2008年度「公益信託 高橋信三記念放送文化振興基金」の研究助成を受け実施した。なお、本論文は「公益信託 高橋信三記念放送文化振興基金」の報告書に基づき、加筆修正したものである。

することで、放送文化の発展と質の向上に寄与することを目指す。

## 1-2. 先行研究

これまでコメンテーターに特化した研究はない。ニュースの娯楽化研究やキャスター研究においては、限定的ではあるものの研究はされてきた。ニュースの娯楽化に関する研究では、萩原滋は、ニュースの最後に何らかのコメントがされる項目が23%あるものの、コメンテーターの発話はキャスターの60%に比べ全体の3%と少ないことを明らかにしている（萩原、2001）。しかし、コメンテーターについてはその88%が男性であることを指摘するに留まり、多くは言及していない。小玉美意子は、コメンテーターを弁護士・医者・学者など専門職、ジャーナリスト、芸能レポーター、元スポーツ選手、ファッション評論家、「ルックスで勝負」という6種類に分類して批判的に考察し、いくつかの問題点を指摘している（小玉、2007）。内容は、ジャーナリズムの視点から見た場合、問題を解説し、掘り下げることがほとんどない。短いコメントに限られるため、説明はおろか論理的でなく、無責任な言いっぱなしが多い。また、ジェンダーの側面から見るとコメンテーターに男性が多いこと、女性は少数で美人が多いことを指摘するが、小玉は実態調査を行ったうえで言及していない。石山玲子らのワイドショー研究では、ニュースをワイドショー番組が扱う際のバリエーション、コメントの仕方、語り方を明らかにしている（石山ほか、2005）。また、申美瀬らの生活相談番組の研究では、司会者とコメンテーターの番組内における独特の役割を明らかにしている（申ほか、2003）。

以上の先行研究は、コメンテーターに特化した研究というよりは他の研究の一環としてコメンテーターに言及しているに過ぎない。言及する際にもコメンテーターの語り方など会話分析や番組構造の中における役割に関するものはある。しかし、実際にコメンテーターが何をどう語っているのかについて、さらに一步踏み込んだ研究は行っていない。そもそも、コメンテーターの全体像も明らかにされておらず、その実態は不明確なままに留まっているのが現状である。

そこで、まずはコメンテーターとは何者かを定めなければならない。広辞苑第六版では「批評、解説や意見を加える人、ニュース解説者」とあり、これらをコメンテーターとして定義する（新村出、2008：1058）こととする。

## 2. 方法

平日のレギュラー番組に登場するコメンテーターの全体像を明示した上で、コメンテーターがどのようなニュースについて何を語っているのかを、ディスコース分析を通して明らかにする。

### 2-1. 対象抽出

記録期間は2008年11月10日（月）から11月14日（金）の5日間である。NHK総合と東京の民間放送5局（日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京）、計6局を対象とした。記録番組は、「ニュース番組」、「報道番組」、「情報番組」など、ニュースを扱う可能性のある全ての番組である。総録画時間は、116時間33分（6993分）である。各放送局および各番組の公式情報を参照に記録番組から「コメンテーターが存在し、かつニュースが番組中に一度でも取り上げられる番組」の抽出を行った。「アドバイザー」、「ゲスト」など、「コメンテーター」という名称では呼ばれないがコメンテーターと同様の位置づけにあると思われる人物が登場する番組も分析対象に含めた。NHK総合を検証した際、レギュラーコメンテーターがいないことや他局と異なり解説委員室があるとの理由から分析対象外とした。抽出した研究対象番組は5局23番組であり、総合時間は42時間17分（2537分）である（表2-1）。次に、コメンテーターの発話内容の多様性を検討するため、複数番組に渡って扱われたトピックを分析対象とした。具体的には、記録した番組を全て検証し、コメンテーターが出演していれば、発話するしないにかかわらずニュースの見出しを「トピック」として全てリスト化した。その中で、各曜日それぞれ3局以上で共通して取り上げられたトピックを、分析対象トピックとして抽出した。

表2-1 研究対象番組

	日本テレビ	TBS	フジテレビ	テレビ朝日	テレビ東京	
4:00						
4:30						
5:00						
5:30				やじうまプラス 04:25-08:00	News モーニング サテライト 05:45-06:35	
6:00	ズームイン！ SUPER 05:20-08:00	みのもんたの 朝ズバッ！ 05:30-08:30				
6:30						
7:00						
7:30						
8:00						
8:30	スッキリ！！ 08:00-09:55	はなまるマーケット 08:30-09:55	とくダネ！ 08:00-09:55	スーパーモーニング 08:00-09:55	E morning 08:56-11:25	
9:00						
9:30						
10:00	ラジかるッ 09:55-11:25			スパイスTV どーも☆キニナル！ 09:55-11:25		
10:30						
11:00						
11:30	おもいっきりイイ！ テレビ 11:55-13:55	ピンポン！ 11:00-13:00		ワイド！スクランブル 11:25-13:05		
12:00						
12:30						
13:00						
13:30						
14:00	情報ライブミヤネ屋 13:55-15:50	2時っチャオ！ 14:00-15:53				
14:30						
15:00						
15:30						
16:00						NEWS FINE 1部 15:35-16:00
16:30						
17:00	NEWSリアルタイム 16:53-19:00		FNN スーパーニュース 16:53-19:00	スーパーJ チャンネル 16:53-19:00	NEWS FINE 2部 16:52-17:20	
17:30						
18:00						
18:30						
19:00						
～抽出番組なし～ 19:00-21:54						
21:30						
22:00				報道ステーション 21:54-23:10		
22:30						
23:00						
23:30			LIVE2000 ニュース JAPAN 月・木 23:30-23:55/金 23:58-24:23		ワールドビジネスサ テライト 23:00-23:57	
0:00						

## 2-2. 文字化とカテゴリー定義

データの文字化・記号化にあたっては、Duboisの記号化の法則を参照しながら、一部表記の変更を行った（Dubois, 1991；橋内武, 1999：39-43）。

カテゴリーの分類と定義は、Van DijkとAllan Bellのニューススキーマを参考に分類（Van Dijk, 1988；Bell, 1988：66-73）した後、発話と発話の間に想定される関係性を範疇化し、テキスト構造の把握を試みた野村真木夫のカテゴリー（野村、2001）と、キャスター同士の会話に注目した村松賢一のカテゴリー（村松、2005）を参考に一部改変し、カテゴリーを分類並びに定義した。

表2-2 発話カテゴリー

カテゴリー	定義
話題提示	先行する文脈の話題、または新たに話題とする対象・事態・状態を簡潔に提示する。
予測	確定的ではない未来の事柄、見通しを述べる。
意見	先行する文脈に対して、注文をつけたり「願望」を表明したりする。 ここでは、批判・否定の意見を含む。
感想	先行する文脈の内容に言及してその感情や感覚的な評価を行う。
コメント	先行する文脈に対する、情報補足、解釈、メタコメントをする。

### 2-3. コメンテーター分類

コメンテーターの肩書、所属は多様であるため、本研究では便宜上、「ジャーナリスト系」、「エンターテイメント系」、「その他の専門家」の3種に分類した。「ジャーナリスト系」とは、新聞や雑誌の記者、雑誌編集長、デスク、報道機関の解説委員などを含む。「エンターテイメント系」とは、タレントやグラビアアイドル、モデル、アスリート、お笑い芸人、作家、歌手、映画監督などを含む。「その他の専門家」とは、学者や弁護士、金融アナリスト、シンクタンク、企業家、政治家などが含まれる。

### 2-4. 分析方法

文字化された言語表現データを用いて質的・量的分析を行った。

#### 2-4-1. 量的分析

- (1) 対象トピック集計：トピック名、チャンネル数、番組数、コメンテーター数を集計し、特徴を分析する。
- (2) 論点：コメンテーター・コメントから論点を抽出し、特徴を分析する。
- (3) 発話カテゴリー分類：「話題提示」、「予測」、「意見」、「感想」、「コメン

ト」に分類し、発話傾向を調査する。単位として文ごとに分類する方法も考えられたが、意味のあるまとまりとしては細かすぎると考え、今回は話者交代までを1ターンとし、発話内容を分類する。1ターン含まれる複数の文の中に「意見」、「感想」、「コメント」など複数のカテゴリーが含まれる場合は、それぞれカウントする。1ターンが交話（「おはようございます」、「よろしく申し上げます」等）のみの場合についてはカウントしない。

- (4) 発話コメンテーター分類：発話したコメンテーターを「ジャーナリスト系」、「エンターテインメント系」、「その他の専門家」に分類し、発話傾向とその関係性について検討する。
- (5) 発話態度分類：コメンテーターの態度を「同調する」、「同調しない」、「どちらでもない」に分類し、態度特性について調査する。

## 2-4-2. 質的分析

文字化されたデータの検証を通して、各トピックやジャンルにおいてどのような特徴が見出せるのかを明らかにする。どのようなトピック・ジャンルについてどのように語る傾向が見られるのか、その特徴と問題点について整理する。

## 3. コメンテーターの現状

### 3-1. コメンテーターの構成

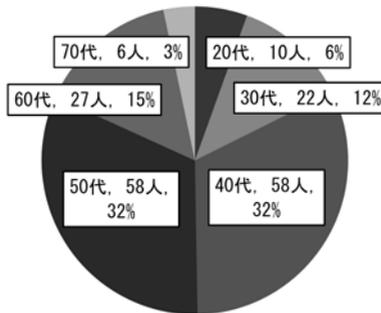


図3-1 コメンテーターの年齢層の割合 (N=212)

本研究の調査対象とした5日間の23番組中、登場したコメンテーター数の合計は212名である。男女比は135対77で男性が1.8倍多い。年齢層では40、50代は、合計で64.0%を占め、最も多かった。次いで30代と60代が27.1%、20代と70代が8.8%を構成している。10代以下、80代以上の人物はコメンテーターとして登場しなかった（図3-1）。

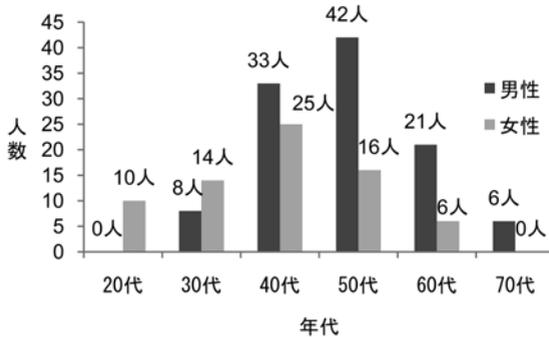


図3-2 男女別の年齢構成 (N=212)

男女別に年齢構成を見た場合、男性の平均年齢は53.0歳、女性は44.2歳で10歳ほどの差がある。図3-2でも年齢の分布が似た形をしつつ、女性の方が全体的に10歳若い傾向が見られた。特徴的なのが20代のコメンテーターである。20代は全て女性だが、その職業はタレント、歌手、グラビアアイドル、女優、ファッションモデルなどであり、特定の業種に集中していた。

### 3-2. コメンテーターの属性

コメンテーターは様々な背景を持つが、本研究では前述の通り便宜上「ジャーナリスト系」、「エンターテインメント系」、「その他の専門家」の3つに分類している。「エンターテインメント系」が45%を占めて最も多く、他の2つの分類がそれぞれ「ジャーナリスト系」24%、「その他の専門家」30%という構成になっている。

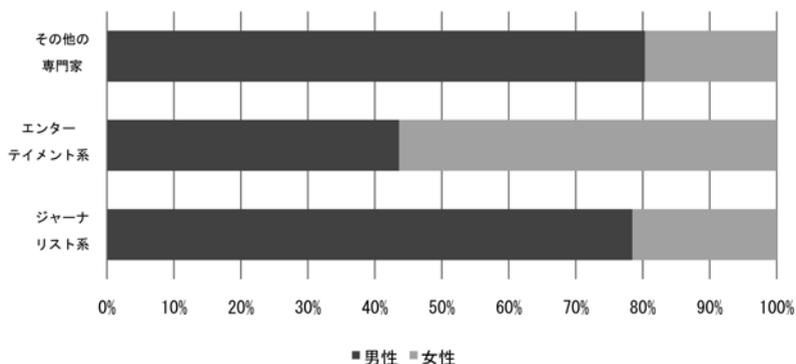


図3-3 男女の属性比較 (N=212)

「エンターテイメント系」の人数が半分近いことは、ニュースに関して専門的な知識を持っていない人間もコメントーターには相当数含まれていることを示している。

また、女性の属性が明らかに「エンターテイメント系」に偏っていることが図3-3から明らかである。男性は3種類の属性に平均的に分散している上、専門的な知識を持つ可能性の高い「その他の専門家」が相対的に多い。コメントーターの年齢と属性は全体的に見た場合バランスが取れているように見えても、男女間で明確な隔たりが存在することが明らかになった。

## 4. 結果

### 4-1. 政治

#### 4-1-1. 対象トピックと論点

「政治」トピックにおいて、3局以上に共通して取り上げられたトピック、チャンネル数、番組数、コメントーター数、論点の結果は、以下の通りである。

表4-1 「政治」におけるトピック・CH・番組・コメンテーター数及び論点

日付	トピック名	CH数	番組数	コメンテーター数	論点
11/10 (月)	麻生庶民派 アピール	5	8	9	①麻生首相批判 ②政治PR問題
	定額給付金	4	8	15	①景気対策か選挙対策か ②代替案 ③所得制限の是非
11/11 (火)	麻生「ホッケ の煮付け」	4	9	11	①麻生首相批判 ②煮付けの存在 ③ホッケの煮付けの味
	田母神論文	5	11	9	①論文内容 ②自衛隊 ③TV中継の有無 ④政治問題(文民統制)
	定額給付金	5	9	16	①批判的な世論調査結果 ②詐欺発生の可能性 ③政策内容の不明確性
11/12 (水)	兵庫県知事 失言	4	12	11	①知事批判 ②一極集中問題 ③言葉遣いの問題
	田母神論文	4	5	7	①論文内容 ②自衛隊 ③政治問題(文民統制)
	定額給付金	4	12	23	①経済効果 ②開始時期 ③政権運営能力の疑問
11/13 (木)	兵庫県知事 失言	3	9	7	①知事批判 ②一極集中問題 ③言葉遣いの問題
	麻生首相談話	4	8	12	①麻生首相批判 ②漫画批判
	定額給付金	4	7	20	①地方自治体の反発 ②野党の反発 ③地方振興券の経験
11/14 (金)	定額給付金	3	6	14	①政治的背景 ②政策形成の段取り ③政権内での分裂
合計		49	104	154	

政治のトピック数は合計で12件あり、総トピック数(43件)の内、28.0%を占めている。「麻生庶民派アピール」(11月10日)と「田母神論文」(11月11日)、「定額給付金」(11月11日)は、5局全てで取り上げられている。特に、「定額給付金」は毎日少なくとも3局6番組以上が取り上げており、5日間を合計すると、1つのトピックに対する番組数と発話したコメンテーターの数が全トピック中で最も多い。各トピックに関して、2、3の論点が提示された。政治において最も顕著に見られたのは「批判」である。麻生首相や兵庫県知事への個人批判から、自民党や政治に対するより広範囲な批判が認められた。定額給付金では給付金の内容から麻生首相の政権運営能力に対する批判まで、批判は幅広い。定額給付金について批判する人が、実際給付金が支給された場合に何に使うか、という話題をするケースも散見した。1万2千円でできることは何か、どうやって使えばお得か、といった、さまざまな提案が出ていた。政策に賛同できないから受け取らないと断固拒否するのは少数派であり、多数派はどう費やしたら面白いかという点をめぐって話題を展開していた。しかし、毎日同じ論点のみが取り上げられていたわけ

ではない。5日間で、給付金に関する世論調査の結果や政策内容の部分的決定、地方自治体の首長による反発など、新しい情報として話題に加わる度に、それらは政策批判、政権批判の主張を支える根拠として用いられた。また、新たなコメンテーターの登場や出来事の発生によって新しい論点が提示されることはあるものの、政策を支持する論点は少なかった。

#### 4-1-2. 発話カテゴリーと属性、同調比率

「政治」におけるコメンテーターの発話カテゴリー分類、属性分類、同調比率の結果は以下の通りである。

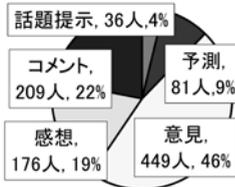


図4-1 「政治」における発話カテゴリー分類

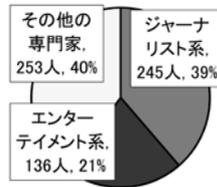


図4-2 「政治」の属性分類

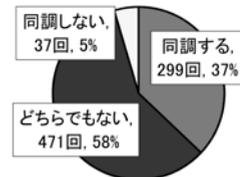


図4-3 「政治」同調比率

「政治」は議論が深くなり、意見の多様性が見られるトピックであると思われた。コメント内容の分析結果でも、「意見」と「コメント」で約7割を占めた。「意見」の多くは「批判」であり、最も多かったのは麻生首相や兵庫県知事などへの個人批判であったが、自民党や政策への批判なども見られた。「批判」に対する同調は多く、「そうそう」などという言葉を用いて、さまざまなコメンテーターが批判を加えていく。論点については、「視点の多様性」というよりも、「批判」をどのような言葉で語るかという「表現の多様性」であった。多くのコメンテーターの「政治批判」というスタンスは基本的に変わず、政策に対する切り口もコメンテーターによって変化するわけではなかった（図4-1）。

「ジャーナリスト系」コメンテーターは、「コメント」として新しいいくつかの情報を提供していた。一方で「エンターテイメント系」コメンテーターの発話には「恥ずかしい」「こういうのはだめだと思う」など、感情的な批判も散見した。また、「エンターテイメント系」コメンテーターの発話と、「ジャーナリスト系」と「その他の専門家」による発話は量質ともに差が出

だが、多様な背景のコメンテーターがそれぞれの立場から持論を展開していたとも言える。例えば、「エンターテインメント系」コメンテーターや専門性のない人物が、「定額給付金に費やす2兆円を医療や福祉の分野に費やすべきである」というような意見を述べるケースは多かった。ただし、発話の多くは定額給付金の批判であり、コメンテーターの多様性に比べると、内容は均質的だったと言えよう（図4-2）。同調比率の結果、「同調する」は37%を占めた。同調比率の中で、最も多かったのは「どちらでもない」で、全体の半分以上を占めた。「どちらでもない」は、コメンテーターが互いの発話について議論を深めるといっても、それぞれが自らの主張を展開したために起こった。多様な切り口がある分、同調を表現せずに、新たに議論を展開したとも考えられるだろう。

逆に、「同調しない」反論表現にも注目できる。「同調しない」（5%）は、他のトピックの中で最も多い。これは、2つの番組が与野党の国家議員を招いた議論の中で、反論表現が多く用いられたためだ。他の番組では、同調表現を含んだ会話の展開から予定調和的な結論に向かう場合が多いのに対し、この場合は異なる立場の専門家が討論を行うという、異例の展開となった（図4-3）。

「政治」分野トピックで興味深かったのは「脱線」現象である。これは、トピックを扱っている最中に、話がそれて本来のトピックから外れるというものである。「定額給付金」のトピックは、コメンテーター間で反論、討論が起きた珍しいケースである。しかしこれは、放送局が与党と野党の議員をゲストとして招いて議論を積極的に行うように構成したために起きた現象であった。ほとんど全てのコメントは、定額給付金や麻生政権への批判で、あらゆる方向から行われた。中には、「定額給付金をもらわなければ“金持ち”のレッテルを貼られ、周囲から変な目で見られるからこの政策は精神的にもよくない」などという憶測に過ぎないコメントもあった。自民党国会議員の例を除けば、定額給付金を支持したコメンテーターは皆無である。いつ実施すれば効果が出る可能性があるのか、どのような段取りで行っていれば成功していたのか、という点に言及するコメンテーターはいたが、基本的にどの番組でも定額給付金や麻生政権を批判していたことに変わりはない。スタジオトークに加わりやすいキャスターらも、積極的に批判していた。事実上、テレビ局による定額給付金批判キャンペーンが実施されていたと見ることが

できるだろう。定額給付金の面白い使用方法の話題はあっても、経済効果を発揮させる使用方法についての話題はほとんどなかった。1万2千円以上のものを購入しなければ経済効果は発揮できないという発話が1件あったが、消費者として、不況にどう立ち向かうかという点について議論するコメンテーターは皆無だった。定額給付金は、一見多様な議論が展開されていたようで、実は政策と政権を批判するという枠組みに限定された範囲での議論しか行われていないことが分かる。

## 4-2. 社会

### 4-2-1. 対象トピックと論点

「社会」トピックにおいて、3局以上に共通して取り上げられたトピック、チャンネル数、番組数、コメンテーター数、論点の結果は、以下の通りである。

表4-2 「社会」におけるトピック・CH・番組・コメンテーター数及び論点

日付	トピック名	CH数	番組数	コメンテーター数	論点
11/10 (月)	筑紫哲也死去	4	9	17	①最高のジャーナリスト ②生前の思い出
	大麻問題	4	5	7	①大学生の自覚が足りない
	砂風呂遊び事故	5	13	10	①なぜ誰も注意しなかったか ②遊びの状況
11/11 (火)	口座番号からカード偽造	3	3	4	①個人情報の流出は防ぐべき
	19歳通り魔殺人	5	11	2	①「誰でもいいから」という独りよがりな殺人
	時津風部屋兄弟子に求刑	3	5	5	①稽古の在り方 ②暴行した兄弟子らへの求刑の是非
11/12 (水)	渋谷の爆発火災	4	7	3	①爆発物の取り締まり体制 ②住宅密集地の危険
	19歳通り魔殺人	3	4	6	①罪の意識の問題 ②非常識な動機
11/13 (木)	渋谷の爆発火災	5	18	23	①爆発物の取り締まり体制 ②似た事故発生の可能性
11/14 (金)	タクシー無賃乗車	3	3	7	①被疑者批判 ②運転手への同情 ③タクシー業界
	自衛隊セクハラ更迭	5	8	8	①自衛隊の不祥事の多さ ②自衛隊の隠ぺい体質
合計		44	86	92	

分析対象となったトピック総数（43件）からみると、「社会」の割合は25.6%（11件）であった。11月10日の「砂風呂遊び事故」や11月13日の「渋谷の爆発火災」は全ての局で取り上げられた。特に爆発事故には、18の番組

が取り上げ、23人のコメンテーターが登場した。11月12日の事件発生当日には、3人が一言ずつしか話していない。

「筑紫哲哉死去」については、本人の過去のエピソードを紹介すること、ジャーナリストとしての経歴を高く評価すること、および哀悼の意を表明することが最も一般的な傾向であった。本人の喫煙を非難するコメンテーターなども少数いたが、基本的には筑紫哲哉を称える、事実上の追悼番組であった。11月10日の大麻問題については、「大学生の間での大麻が蔓延しているため大麻所持や利用に対する罰則、取り締まりを厳しくすべきだろうか」という流れのコメントが多い。渋谷で起きた爆発事故については、プロであるにも関わらず火薬の所持、取り扱いが甘いことに対する批判、「他にもいい加減な火薬の扱いをしている人がいるのではないか」「もっと火薬の取り締まりについて考えるべきである」という発話があった。両方とも問題が身近であることへの懸念をふまえて、より厳格な取り締まりの必要性を強調していた。大麻の普及や火薬製造の実態については断片的な情報しかないにも関わらず、あたかも広く一般に普及しているかのように語り、結果として必要以上の不安を煽るものであった。「砂風呂遊び事故」や「19歳の通り魔殺人」、「時津風部屋兄弟子に求刑」、「自衛隊のセクハラ更迭」については、当事者の認識を問う発話や、なぜそのような犯罪が起こったのかという推測が目立った。規制強化や厳罰化を求める発話は、頻繁には出ないものの、大麻や爆発事故では、必ずコメンテーターの誰かが主張していた。

#### 4-2-2. 発話カテゴリーと属性、同調比率

「社会」におけるコメンテーターの発話カテゴリー分類、属性分類、同調比率の結果は以下の通りである。

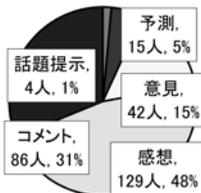


図4-4「社会」における発話カテゴリー分析

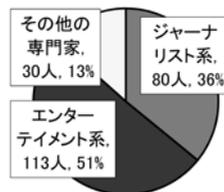


図4-5「社会」における属性分類比率

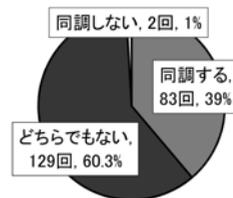


図4-6「社会」における先行コメントへの同調比率

「社会」のトピックでは、事件や事故から訃報まで、対策の提言や「感想」の表明、「予測」が行われた点で特徴的だった。しかし主張があったとしてもそれは否定されることもなく、個人的な意見の言いっぱなしというケースが多かった。実際に提示された論点では、限られた情報に基づく「予測」や「意見」が目立ち、事件や事故の状況の予測や解決策の提言では、熟慮を欠いたものも多数見られた。例えば「砂風呂遊び事故」では「やっぱり四方八方から砂がかげられちゃったんでしょねえ」のように予測に基づいた感想、「本当にただの遊びだったのか、ってゆうのは疑問を持ちますけれども」のようにいじめがあったのではないかという印象を抱かせるコメントが見られた。「渋谷の爆発火災」については、事故当事者が火薬保管に関する法律を知っていたのかわからなかったのか不明なまま、コメンテーターがさまざまな推測をしていた。事件発生当日もしくは翌日に番組が放送されたため、当然コメンテーターらは情報がほとんど集まっていない状態で発言することを求められている。とはいえ、自由に事件事故の原因を推測し、安易に規制強化を呼びかけることが適切であるとは言えないだろう。コメンテーターが、トピックについて独自の知見や知識を披露するという状況は、「筑紫哲哉死去」トピック以外では確認できなかった。「筑紫哲哉死去」では、筑紫哲哉と実際に仕事をした人、仲の良かった関係者が、レギュラーやゲストとして多数出演したことによって、他のトピックには見られないほど多くの背景情報や評価が提供された。専門的な知見は、他のトピックでは見られないのだろうか。規制や法律の関わるケースについては、弁護士の見解は専門的な見地からの意見と呼べるだろう。ただし、事件発生から間もない段階、持っている情報が少ない状況での提言や感想が主流であった。以上の傾向は、そもそもコメンテーターが発言する意義はあったのか、という疑問を投げかける。事件事故など関心の集まりやすい出来事が発生した際、速報として扱うことはともかく、情報が少ないにも関わらず、何人ものキャスターやコメンテーターが憶測をして簡単な結論を下す必要はあるのだろうか。その日の注目ニュースであったため、コメンテーターが意見を述べる時間を設けたということかもしれない。しかし、速報であればあるほど、トピックに相当程度詳しい人物でもなければ深慮に欠ける発言をしてしまうことは否めない。逆に、コメンテーターに求められているのは、内容や含蓄のある発言をすることではなく、とりあえず感情表現を試みたり、問題を勝手に解釈して結論付けたりする

ことなのかもしれない。いろいろな解釈の可能性について議論をし、その場しのぎの感想や意見を戒める会話などしていれば、コメンテーターの発言を慎重に受けとめるべきだということが伝えられたかもしれない。しかし、「社会」のトピックにおいてそのような発言や配慮は見られなかった。

#### 4-3. 芸能

##### 4-3-1. 対象トピックと論点

「芸能」トピックにおいて、3局以上に共通して取り上げられたトピック、チャンネル数、番組数、コメンテーター数、論点の結果は、以下の通りである。

表4-3 「芸能」におけるトピック・CH・番組・コメンテーター数及び論点

日付	トピック名	CH数	番組数	コメンテーター数	論点
11/10 (月)	石井慧「私は只になりたい」	4	6	10	①格闘技選手としての可能性 ②丸刈りなら映画割引
	小室哲哉・KEIKO	4	9	17	①小室容疑者に差し入れ、和田アキコ TBS に怒り ②加山雄三借金 23 億円を完済
11/11 (火)	流行語大賞	4	12	21	①流行語大賞今年の注目に対する個人感想
	小室哲哉・KEIKO	4	11	12	①母親からの手紙に小室容疑者の涙
11/12 (水)	石井慧 出版	3	6	6	①石井慧のユーモア ②ブログ欄家としての展望
11/13 (木)	ニュースペーパーDVD	3	4	7	①歴代首相で CD デビュー
	小室哲哉・KEIKO	4	12	13	①小室容疑者逮捕後初 KEIKO 無言の謝罪
11/14 (金)	泰葉ライブ	3	5	10	①泰葉 20 年ぶりライブ ②生電話で最近の気持ち
	豊川悦司アナフィラキシーショック	4	8	11	①アレルギー経験について

「芸能」は、全てのトピック（43件）のうち、23.3%（10件）だった。「芸能」トピックを取り上げたのは78番組、発言したコメンテーターは110名だった。「流行語大賞」と「小室哲哉・KEIKO」関連のトピックは、取り上げた番組が12番組と、最も多かった。コメンテーター数で言えば「流行語大賞」が最も多く、21名という結果だった。「小室哲哉・KEIKO」のトピックは3日間にわたって取り上げられた。このトピックは、2008年11月4日に小室哲哉が5億円の詐欺容疑で逮捕されたことから始まっている。11月10日で取り上げられた内容は弁護士に「拘置所は寒い」と伝えたこと、TBSが小室容疑者に差し入れたことに対し和田アキコが怒ったことである。11月11日

になると、小室容疑者に母からの手紙が渡された内容に、さらに11月13日には、小室容疑者の妻、KEIKOの父親の1周忌があったこと、KEIKOがカメラに向けて無言で謝罪したことが伝えられた。コメントの傾向は、小室容疑者に対する批判が多いが、キャスターに借金があるか聞いたりするなど、話が脱線するケースもあった。

#### 4-3-2. 発話カテゴリと属性、同調比率

「芸能」におけるコメントーターの発話カテゴリ分類、属性分類、同調比率の結果は以下の通りである。

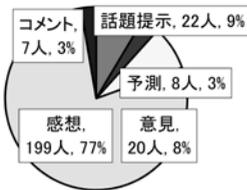


図4-7「芸能」における発話カテゴリ分類

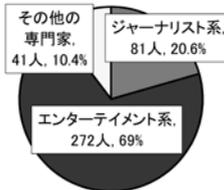


図4-8「芸能」における属性分類比率

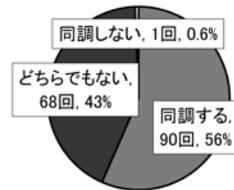


図4-9「芸能」における先行コメントへの同調比率

芸能に関するトピックは、「感想」や「話題提示」が、合計で約86.3%と大半を占めた。発話の68%は、「エンターテインメント系」のコメントーターによるものである。トピックの性格上か、提言や分析といったものは少ない。石井慧、小室哲哉、KEIKOなど、トピックが扱う人物に対する感想が特に多かったと言える。一方で、コメントーターとトピックで取り上げられた人物の関係性が薄いと、周辺的话题に終始する場合もある。例えば石田慧のトピックでは、周辺の話題として、丸刈りや格闘技選手としての将来性、試合日程、出版された本に記載されていた家訓などが挙げられた。発話したコメントーターは「エンターテインメント系」が多く、彼らは専門的な意見や背景情報といったものは基本的に提示せず、キャスターらと雑談をするに留まった。コメントーター独自の見解と言えるものはほぼ見られず、あえて提示するとすれば、話題を自分に結び付けた経験の話題くらいであった。コメントーターの人数が1番多かったトピックは「流行語大賞」で、21名のコメントーターが登場した。コメントの内容は、コメントーターが考えている流行語とは何かという話題や、流行語を作ったタレントのモノマネを披露する

など、トピックと直接関係のない話題が多く、コメンテーターの発言も個人的な「感想」が多くなる結果となった。

#### 4-4. スポーツ

##### 4-4-1. 対象トピックと論点

「スポーツ」トピックにおいて、3局以上に共通して取り上げられたトピック、チャンネル数、番組数、コメンテーター数、論点の結果は、以下の通りである。

表4-4 「スポーツ」におけるトピック・CH・番組・コメンテーター数及び論点

日付	トピック名	CH数	番組数	コメンテーター数	論点
11/10 (月)	西武ライオンズ優勝	5	20	20	①試合内容 ②優勝セール
	相撲	4	11	4	①大相撲九州場所 ②朝青龍 横綱の正念場
11/11 (火)	体操富田引退	5	6	5	①引退決断の理由
11/12 (水)	オグシオペア解消	4	6	4	①ペア解消の理由
11/13 (木)	WBC	4	6	6	①監督、選手に関する話題 ②サムライジャパンのネーミング
11/14 (金)	ゴルフ	4	8	3	①石川遼ツアー初首位内容
	オグシオペア解消	5	7	5	①最終試合
合計		31	64	47	

分析対象となったトピック（43件）総数からみると、「スポーツ」の割合は16.2%（7件）であった。西武ライオンズの優勝は、全ての局で取り上げられ、20番組に及ぶ。また、大相撲は九州場所初日ということもあり、4局、11番組で扱われた。オグシオペア解消のトピックについては11月11日と14日の両日に取り上げられた。スポーツコーナーは、司会者とスポーツ担当キャスターや取材レポーター間での会話が多く、時折レギュラーコメンテーターが発言している。11月10日の大相撲九州場所初日、元横綱である曙が「スーパーモーニング」（テレビ朝日）にゲストコメンテーターとして招かれ、現横綱である朝青龍の問題について自身の見解を述べていた。また、11月11日には、体操選手の富田本人が「とくダネ！」（フジテレビ）のゲストコメンテーターとして生出演し、引退決断の理由を直接語っている。

#### 4-4-2. 発話カテゴリーと属性、同調比率

「スポーツ」におけるコメントーターの発話カテゴリー分類、属性分類、同調比率の結果は以下の通りである。

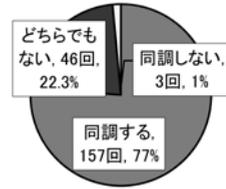
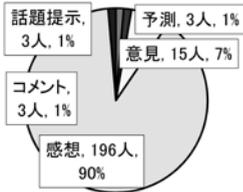


図4-10 「スポーツ」における発話カテゴリー分類比率      図4-11 「スポーツ」における属性分類比率      図4-12 「スポーツ」における先行コメントへの同調比率

「スポーツ」トピックは、司会者とスポーツ担当キャスター、取材レポーター間での会話が多い。レギュラーコメントーターやゲストコメントーターの発話は、「感想」が90%を占めていた。続いて「意見」が6.8%、「話題提示」、「予測」、「コメント」が1.4%であった。分析期間中は、西武ライオンズの優勝が20番組によって取り上げられ、表4-4の論点には優勝セールの話題も含まれる。その結果、スポーツに直接関係のない話題が多くなり、コメントーターの発言に「感想」が多くなった可能性がある。しかし、優勝セール以外の論点においては、試合内容や技術面を専門的な知識を持ってコメントするのではなく、選手の年齢（若手である）や容姿（イケメン、カッコイイなど）に触れる発言も多数見られた。専門外のコメントーターがコメントをしたため、「感想」に集中したとも考えられる。

コメントは「エンターテイメント系」コメントーターの発話が75%、続いて、「ジャーナリスト系」が17.5%、「その他の専門家」が7.4%であった。分析期間中に3局以上が取り上げたスポーツは、野球とバドミントンが2件、相撲、体操、ゴルフがそれぞれ1件である。相撲のコメントについては、元横綱の曙が朝青龍問題について語り、体操選手の富田が自分の引退について直接語った以外は、専門外のコメントーターが発話している。例えば、元日本女子バレー代表の三屋裕子や元スキージャンプ選手であった萩原次晴が、体操富田の引退について同じアスリートという立場からコメントをしている。番組が取り上げるトピックに合わせたアスリートコメントーターが登場して、専門的なコメントをする場合はまれである。実際は直接関係のない

アスリートがコメントをするという事態が日常化している。では、専門知識がない人によるコメントは、「感想」が多くなるということであろうか。番組によっては「ジャーナリスト系」や「その他の専門家」のレギュラーコメンテーターが発話しないケースもあった。評論家でありコメンテーターでもある宮崎哲也は「個人的な意見、変わった意見を言うのはいいんだけど、それがあまりにも妥当性を欠いていた場合には責任を取らされる。そうやっていくことは自覚すべきです」と述べている（宮崎、2008：19）。この意見を参考にするならば、責任を取らされない発話が「感想」という結果を導いたとも考えられる。そして本分析結果では、「同調する」が、76.2%と圧倒的に多いのが特徴的だった。一同が笑顔で応答しているものはカウントしていないため、画面上で見ると全体の「同調」の雰囲気は、さらに強調されているように見える。「同調しない」は1.3%であったが、これらの発話中も、コメンテーターは笑顔で応えていたため、発話内容と画面上の表現には差があることにも留意しなくてはならない。

#### 4-5. 国際

##### 4-5-1. 対象トピックと論点

「国際」トピックにおいて、3局以上に共通して取り上げられたトピック、チャンネル数、番組数、コメンテーター数、論点の結果は、以下の通りである。

表4-5 「国際」におけるトピック・CH・番組・コメンテーター数及び論点

日付	トピック名	CH数	番組数	コメンテーター数	論点
11/13 (木)	金融サミット	3	7	4	①金融サミットのテーマ ②新興国支援策 ③日本 10 兆円拠出の表明
11/14 (金)	金融サミット	5	12	5	①景気対策 ②日本 10 兆円拠出の表明
	合計	8	19	9	

「国際」に当たるトピックは、11月13日と11月14日の「金融サミット」の2件で、総トピック数（43件）のうちの4.7%（2件）だった。トピックの内容は、いずれも2008年11月14日よりワシントンにて開かれたG20（以下、金融サミット）に向けたものであり、金融サミット開催日の前日と当日に取り上げられた。

11月13日には、3放送局、7番組が取り上げた。登場したコメンテーター

数は12名だが、実際に発話したコメンテーターは4人であった。11月14日のサミット当日には、民放全てのチャンネルが当トピックを取り上げた。番組数は12である。登場したコメンテーター数は19人だが、実際に発話したコメンテーターは5人であった。

#### 4-5-2. 発話カテゴリと属性、同調比率

「国際」におけるコメンテーターの発話カテゴリ分類、属性分類、同調比率の結果は以下の通りである。

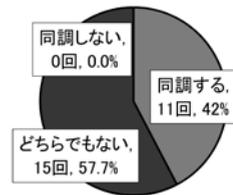
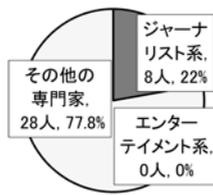
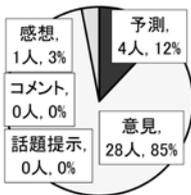


図4-13 「国際」における  
発話カテゴリ分類比率

図4-14 「国際」におけ  
る属性分類比率

図4-15 「国際」における  
先行コメントへの同調比率

分析対象となる全ジャンルの中で「国際」に当たるトピックは、わずか4% (2件) だった。最も多かった「政治」(26.6%) と比べて6倍以上の差が開いた。「国際」トピックの特徴として挙げられるのは、他のジャンルと比べてコメンテーターによる発話が圧倒的に少ないことである。「国際」に当たるトピックは、G20が開幕される当日と前日のみに取り上げられた。内容を見ると、前日には金融サミットに対する期待と予測、当日には麻生首相の10兆円拠出の表明に対する評価が最も多かった。サミットの成果や意義に対する発話は少ない。深く掘り下げ、専門家が長時間にわたってコメントをしたのは「テレビ東京」のみだった。また、「国際」では、登場しても発言しないコメンテーターが多かった。金融サミットを取り上げた番組は、2日間で19件、登場したコメンテーターは31人いた。ところが、実際に発話したコメンテーターは9人と、3分の1に留まった。登場しても発話しなかったコメンテーターは、笑ったりうなずいたりするくらいの反応しか見せなかった。コメンテーターを招いたにも関わらず、キャスター同士のやり取りに終始した番組もあった。

#### 4-6. 科学

##### 4-6-1. 対象トピックと論点

「科学」トピックにおいて、3局以上に共通して取り上げられたトピック、チャンネル数、番組数、コメンテーター数、論点の結果は、以下の通りである。

表4-6 「科学」におけるトピック・CH・番組・コメンテーター数及び論点

日付	トピック名	CH数	番組数	コメンテーター数	論点
11/12 (水)	ママさん宇宙飛行士	3	6	7	①夢と経歴 ②家族の理解 ③業務内容
	合計	3	6	7	

分析対象となったトピック（43件）総数からみると、「科学」の割合は2.3%（1件）であり、「国際」の4.7%（2件）を下回る。「ママさん宇宙飛行士」のトピックは3局、6番組で取り上げられた。

##### 4-6-2. 発話カテゴリーと属性、同調比率

「科学」におけるコメンテーターの発話カテゴリー分類、属性分類、同調比率の結果は以下の通りである。

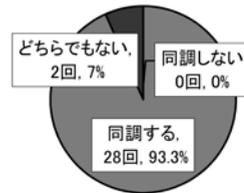
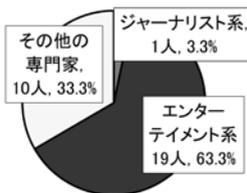
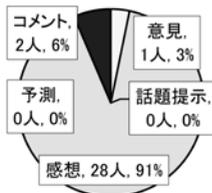


図4-16 「科学」における発話カテゴリー分類比率

図4-17 「科学」における属性分類比率

図4-18 「科学」における先行コメントへの同調比率

「科学」でのコメンテーターの発話割合は「感想」が90.3%となった。ここではゲストコメンテーターが招かれなかったこともあり、コメンテーターによる「話題提示」はなかった。本トピックは「科学」に分類されていたが、ここでは科学について語られるというよりも、「ママさん宇宙飛行士」というトピック名からも分かる通り、ママや女性に関する話題が多く語られていた。女性コメンテーターからは、「いい感じの旦那さんですよー」、「子供をつくるタイミングって一言で言ったって、そのときにできるかできない

かわからない訳だから」、また男性コメンテーターからも「ご主人は偉い」、  
「これから男は育児も料理もみんなやっとなきゃいけないですね」などの  
コメントがあった。コメンテーターが男性であれば男性視点で、また女性で  
あれば女性の立場で自身の経験に基づき感想を述べていたのである。コメン  
テーターも科学の専門家が発言するのではなく、「エンターテイメント系」  
コメンテーターの発話が63.3%となり、全体の3分の2を占めた。ここでも  
専門外であるコメンテーターがコメントをしている。スポーツ同様、専門知  
識がない状態でのコメントは「感想」が多くなるということなのかもしれない。  
“ママさん”がつけ加えられたことにより、コメントが容易になったと  
も考えられる。発話態度も、「同調する」が93.3%となった。「どちらでもない」  
が7%、「同調しない」は、1件もなかった。旧来の男と女の役割というく  
くりで語られる限り、示唆に富んだコメントは期待できないだろう。まして  
や、科学というジャンルについて考えを深化させることは難しい。

## 5. 結論

本研究ではコメンテーターとはいかなる存在であり、どのような役割を果  
たしているかについて分析を行った。分析結果から得られた諸知見をもとに、  
コメンテーターの特徴と問題点について考察する。

### 5-1. コメンテーターの多様化と男女比

コメンテーターの現状を分析した結果、1週間の間に非常に多くのコメン  
テーターが番組に登場し、ニュースについて何らかのコメントをしているこ  
とが分かった。平日、東京キー局の全てのニュース番組と報道番組、情報番  
組で登場したコメンテーターの総人数は212人に上る。コメンテーターの男  
女比は、男性が135 (64%)、女性が77 (36%) であった。男女別に年齢構成  
を見ると、男性の平均年齢が53.0歳、女性が44.2歳と、10歳ほどの差があった。  
特に20代のコメンテーター10人は全て女性であり、その職業はタレント、  
歌手、グラビアアイドル、女優、ファッションモデルなどの「エンターテイ  
メント系」であった。男女で職業の違いを参照した場合、女性が圧倒的に「エ  
ンターテイメント系」に偏っているのに対して、男性は「ジャーナリスト  
系」、「エンターテイメント系」、「その他の専門家」に平均的に分散している  
こと、また「その他の専門家」が相対的に多いことが分かった。

## 5-2. コメンテーターの発話態度と予定調和

コメンテーターの発話態度の特徴を分析した結果、全てのジャンルで「同調する」が半数以上を占めた。キャスターを中心とした番組形式が多い中、コメンテーターたちのコメント内容は、キャスターの意見に同調的になる傾向が強く見られた。特に「スポーツ」に関するトピックでは、「同調する」が、76.2%となり、全体の4分の3以上を占めた。本研究では発話をカウントしているため、無言の笑顔で応答しているものは結果に含まれていない。もし無言の笑顔が「同調する」に含まれた場合、「同調する」の割合は更に増すであろう。特に、キャスターの特性が強い番組においては、コメンテーターのキャスターの意見への「同調」が確認された。コメンテーターは、キャスターの意向に沿ったコメントを述べるだけではなく、違う観点からその意見を補足し、場合によっては異論を唱えることも、役割として求められているのではなかろうか。コメンテーターがコメントを控えたとしても、今日の映像編集技術によって、コメンテーターの画像が小窓に映し出される。彼らは、「声なき笑顔のコメンテーター」としての役割を担っているかもしれない。「同調しない」は1.3%であったが、これらの発話中も、コメンテーターは笑顔であった。否定的な内容を笑顔で応える態度は、制作側から期待される演出であり、番組内の予定調和的な展開が読み取れる。

## 5-3. コメンテーターの人数とその発話のギャップ

番組内に登場したコメンテーターの人数と、コメンテーターの発話には大きなギャップがあった。そこには、いくつかの特徴がある。まず、コメンテーターの人数と、実際に発話するコメンテーターの人数の差があることである。「国際」トピックの「金融サミット」は、サミット開催の前日と当日（11月13日と11月14日）に取り上げられた。前日（13日）の内容は、金融サミットに対する期待と予測、当日（14日）には、麻生首相の10兆円拠出表明に対する評価が主だった。サミットの成果や意義に対する発話が少なく、非常に限られた論点から金融サミットを語っていることがわかる。また、「国際」では、出演していても発話しないコメンテーターが多かったのが特徴であった。「金融サミット」を取り上げた番組は、2日間で19件、登場したコメンテーターは31人いた。ところが、実際に発話したコメンテーターは9人で、わずか3分の1に留まった。登場しても発話しなかったコメンテーターは、笑ったり

うなずいたりするくらいの消極的な態度を見せている。コメンテーターを招いたにも関わらず、キャスター同士のやり取りに終始した番組もあり、全体的にコメンテーターの存在感が薄かったと言える。「国際」トピック（特に大規模な国際会議などの場合）においては、他トピックのように、自分の経験や感想によるコメントが行いにくい。そのために、専門家以外のコメンテーターがコメントを行わず、結果として少数のコメンテーターによって、限定的な論点が提示されるに留まったのではないだろうか。

次に、コメンテーター人数比と、彼らによる発話量が、必ずしも比例していないことが挙げられる。すなわち、人数が多いからといって、コメント量が多いわけではないということである。この現象は、特に「政治」のジャンルで目立っていた。コメンテーター人数としても最も多かったのは、「エンターテインメント系」コメンテーターで、48.9%と、約半分を占めていた。しかし、コメント発話数が最も多かったのは、「ジャーナリスト系」コメンテーターで、コメント発話回数が44.7%、発話文字数カウントにおいては59.9%を占めた。「ジャーナリスト系」コメンテーターは、1人あたりの発話回数が多く、また1回の発話内容も長い。一方で「エンターテインメント系」コメンテーターは、人数は最も多いが、1人1回あたりの発話内容は少ない。コメンテーターの属性は発話回数や発話内容に関係していると考えられる。

#### 5-4. コメンテーターの批判型発話と脱線現象

本研究で興味深かったのは、批判型発話が多いこととコメンテーターの発話で見られる「脱線」現象である。コメンテーターの批判型発話は、「政治」と「社会」のジャンルで際立っていた。「政治」は、全トピックの中でも、議論が深くなり、意見の多様性が見られるトピックであると思われた。コメント内容の分析結果でも、「意見」と「コメント」で7割以上を占めている。そして、その「意見」の多くは「批判」であった。最も多かったのは麻生首相や兵庫県知事などへの個人批判だが、自民党や政策への批判に拡大したケースもあった。「批判」に対する同調は多く、「そうそう」などという言葉を用いて、さまざまなコメンテーターが批判を加える。論点は、「視点の多様性」というよりも、「批判」をどのような言葉で語るかという「表現の多様性」であった。多くのコメンテーターの「政治批判」というスタンスは基本的に変わらず、政策に対する切り口も、コメンテーターによって変化する

わけではなかった。「ジャーナリスト系」コメンテーターは、「コメント」として新しいいくつかの情報、たとえばアメリカの政治情勢や政治情勢などを提供していた。一方で、「エンターテイメント系」コメンテーターの発話には「恥ずかしいことをする」、「こういうのはだめだと思う」など、感情的な批判も散見した。「定額給付金」においても、発話の多くは定額給付金の「批判」であった。コメンテーターの多様性に比べると、内容は均質的だったとも受け取れる。5日間で、新しい情報が話題に加わっても、それらは政策批判、政権批判の主張を支える根拠として援用された。また、定額給付金に特徴的なケースとして、コメンテーター同士の討論が行われたことが指摘できる。ただし、これは与党と野党の国会議員がゲストとして招待され、討論を行ったという、いわば企画され、予定されていた討論であった。討論があったために反論が増えたものの、それは招待した番組側が既に予測していたことになる。調査期間中は、80人近いコメンテーターらが議論したにも関わらず、どの番組でも似たような批判が展開されていたことは、コメンテーターの可能性や社会的意義について疑問を抱かせる。政策、政権批判一色となることで、明確なメッセージを視聴者に送ることができるかもしれないが、そのために議論の幅を狭め、単純化する恐れがある。定額給付金は、調査対象期間から半年後には全国の市町村で支給されるに至った。1週間にわたって、大勢かつ多様なコメンテーターが展開した、事実上の批判キャンペーンとは何だったのかについて改めて考えざるを得ない。

次に、「脱線」現象について考察する。「脱線現象」とは、特定トピックを扱っていたのにも関わらず、話がそれて本来のトピックとは異なる話題へと移行してしまう現象を指す。「脱線現象」は特に「政治」で見られた。例えば「麻生『ホッケの煮付け』」では、「ラジかるッ」（日本テレビ）で、スタジオが実際に「ホッケの煮付け」を作り、それをコメンテーターが食べるという場面があった。コメンテーターたちは「おいしい」と何度も口にしながらホッケを食べ、最後は「麻生さんは庶民派アピールしない方がいい」「ホッケの煮付けは商品化すべき」といういい加減なコメントで終了した。他にも、コメンテーターが自身の経験を語りだすなど、しばしばトピックとは関係ない話題へと話が脱線する傾向が見られた。これにはいくつかの理由が考えられる。まずは「政治」問題のソフト化、「硬い」話題よりは、料理の味などの「やわらかい方向」へトピックを変質させようとする傾向である。このこ

とは、ニュース番組と生活・情報番組の越境と無関係ではないように思われる。また、自分自身の経験への脱線は、「コメンテーターが、知らないことについても話さなくてはならない、もしくは話したがる」傾向を示しているのではないかと思われた。すなわち、専門的な立場以外からは、「意見」や「コメント」によってトピック解説をすることが難しい。それでもコメンテーターの役割を与えられている以上、コメンテーターは何かしらのコメントをしなくてはならない。そのような場合は、「こんなことを言われたらいやだ」など、自分の問題に引き付けてコメントせざるを得ないのではないだろうか。このような状況は、「スポーツ」「科学」のジャンルでも認められた。「エンターテインメント系」を筆頭に、「ジャーナリスト系」、「その他の専門家」のコメンテーターが、専門外であったとしても自身の経験、体験に基づいた感想にすり替えてコメントをしている実態が示された。

本研究では、現在日本のテレビに増加しているコメンテーターの発話のディスコース分析を通じて、その現状を明らかにした。ここから示唆されることは、コメンテーターの「解説機能の喪失」という事態である。質問に対し必ずしも具体的なコメントは与えられず、批判や感想をどのような言葉で語るかという表現の多様性であって、多くのコメンテーターによる固定化された発話が繰り返されている様子が伺える。確かに報道系から情報系、ワイドショーにいたる様々な番組でコメンテーターは増え、その業種も多様となった。しかし、期待される論点は提示されず、示唆に富んだコメントも発話されていない。話題を個人化し感想ばかりを連呼するコメンテーターの存在は、我々の考えを深化させるどころか、ノイズを撒き散らし、情報の質をも低下させる危険性がある。本分析の結果は、番組が登場しているコメンテーターを十分活用できず、コメンテーターの機能が低下している現状を浮き彫りにしたと言えるのではないだろうか。

## 6. 今後の課題

本研究を通じて、コメンテーターの現状や特徴以外にも、新たな課題が浮上した。まず、番組ジャンルの境界が曖昧になり、番組ジャンルの「越境」とでも呼ぶべき事態が起こっていることである。各局の番組ホームページや制作担当スタッフの関連記事を参考に調査対象とする番組を記録したのだが、記録した全ての番組を検証したところ、「ニュース番組」、「報道番組」、「情

報番組」の境界が非常に曖昧であることが分かった。各局の提示をそのまま信じるのは難しい。佐藤卓己は、情報番組がどのジャンルに入るのかを各テレビ局に問い合わせたが、『教養』、『教育』、『娯楽』、『報道』の複合番組という回答しか得られなかったと述べている（佐藤、2008:13）。ちなみに、「みのもんたの朝ズバッ！」(TBS)のホームページでは、「報道・天気」と「生活・情報」と記載されていた。現状はさらにボーダーレス化が加速している。「エンターテインメント系」コメンテーターが多く採用されるようになった結果、コメンテーターの解説機能の低下に繋がったと見ることもできる。以上のことから、まずは共通する評価基準を用いた綿密な番組検証が今後の課題として必要であろう。番組特性が明らかになった後、再びコメンテーターの役割と関係性について検討したいと考えている。

次に本研究では、番組の特性とコメンテーターの発話の関係については言及していない。番組によって当然構造は異なり、コメンテーターの位置づけ、キャスターとコメンテーターの関係も異なる。また、扱うニュース項目も異なる可能性がある。番組構造の違いが、コメンテーターの属性や発話、しぐさといったものとどのような関係があるのかを検証し、番組構造がコメンテーターの在り方に与える影響について考察する必要があるだろう。いわば番組の多様性とコメンテーターの関係であり、このような分析を行うことで、なぜコメンテーターは特定の発話や行動をとるのかを理解することができるのではないか。本研究は、コメンテーターに関するパイロット研究として全体的な傾向を調査分析するにとどめたが、コメンテーターの在り方に影響する構造的な要因を明らかにすることも有意義であると考えられる。特に、キャスターとコメンテーターの会話分析を通して、番組によって異なる会話パターンを明らかにすることができる。日常会話風のものから厳格なニュースインタビュー型のものまでいくつかグループ化しうることが容易に想像される。それらの会話パターンが、逆にその番組の在り方について、多くの示唆を与えるものと考えられるのではないだろうか。

最後に、本研究はコメンテーターの発話を中心とし量的・質的分析を行ったが、文字化された言語表現データから単語の使用頻度を解明する分析も可能であろう。また、分析の単位の設定を話者交代までの1ターンとしたが、「文」単位にした場合、さらに詳細な結果が得られるに違いない。伊藤守は『テレビニュースの社会学』の中で、テレビのテキストは、マルチモダルな意味

作用から成立しているとし、「ニュースのなかの言語は、音声言語のみならず映像や音声や音響そして文字という、複数のマテリアルな特性を帯びた媒体の意味作用との相互関係のうちに織り込まれているのであり、ニュース・テキストのディスコース分析は「マルチモダリティ」分析と接続される必要がある」と述べている（伊藤、2006：34-35）。記録されたデータから、コメンテーターの「声」の「質」の差異や、ジェスチャーで表出される「目線」、「うなずき」などを調査することで、さらに媒体の内部のマテリアルな違いが孕む意味作用を重視した分析が可能となるであろう。テレビを取り巻く技術的な進歩の中で、これらの番組には共通して内容や構成に様々な工夫が凝らされ、効果音や小道具、テロップを多用した演出が多く見受けられた。このような傾向は、制作者側が娯楽的要素を用いて視聴者を引き付け、視聴率を上げるための目的とし乱用しているようにも受け取れる。川端美樹は、「ソフトニュースの増大というような内容面での変化よりも、テロップや字幕、フィリップ、BGMや効果音、あるいはCGなどの視覚的装置や他の手段によるショーアップの傾向、すなわち番組演出の過剰化とも言える形式面での変化が大きかったことがわかった」と述べている（川端、2006）。このような流れの中で、コメンテーターも番組演出の一部、娯楽機能的な役割として採用されてしまうのだろうか。これらを明らかにするためにも、コメンテーターの発話内容に加え、その語り方や切り取られる映像をいかに関連づけて分析するかも今後の課題であろう。

情報が氾濫する社会の複雑な事象を解きほぐし、受け手となる視聴者が冷静に考えられるようなヒントを与え、複数の分野からコメンテーターを採用することで、多様な視点を視聴者に提供する。今こそ、そのようなプロフェッショナルなコメンテーターが、我々市民に対して求められているのである。

## 参考文献

石山玲子、川上善郎、大石千歳ほか（2005）「ワイドショーの構造分析－形式の概念化とスタジオトークとの関連性」『コミュニケーション紀要』成蹊大学大学院文学研究科、(17)、97-128頁。

川端美樹（2006）「テレビニュース番組における形式的娯楽化の現状とその問題：字幕・テロップを中心として」『目白大学総合科学研究』(2)、209-219頁。

- 小玉美意子 (2007) 「コメンテーターを考える」『AURA』フジ編成制作局知財情報センター調査部、12、8-14頁。
- 佐藤卓己 (2008) 『テレビ的教養 一億総博知化への系譜』NTT出版。
- 新村出編 (2008) 『広辞苑<第六版>』岩波書店。
- 申美淑、岡井崇之、王萍 (2003) 「パフォーマンスとしてのテレビ人生相談 - 『思いっきり生電話』の言説分析から-」『コミュニケーション研究』上智大学コミュニケーション学会、(33)、83-104頁。
- 野村真木夫 (2001) 「テキストにおける文・発話の関係とテキストの構造化」『上越教育大学紀要』443-457頁。
- 萩原滋 (2001) 「ニュース番組の内容と形式」萩原滋編『変容するメディアとニュース報道—テレビニュースの社会心理学』丸善。
- 橋内武 (1999) 『ディスコース：談話の織りなす世界』くろしお出版。
- 宮崎哲弥 (2008) 「^プロ、の発言者たり得るために常に表現の深化を迫すべき」『調査情報』TBSメディア総合研究所、5-6、16-21頁。
- 三宅和子、岡本能里子、佐藤彰編 (2005) 『「マス」メディアのディスコース：特集—メディアとことば2』ひつじ書房。
- Bell, A. & Garrett, P. (1998). *Approaches to Media Discourse*, Blackwell Publishers.
- Van Dijk, Teun A. (1990). *News as Discourse*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- (1988). *News Analysis: Case Studies of International and National News in the Press*, Hove and London: Lawrence Erlbaum.
- (2008). *Discourse and Context A sociocognitive Approach*, Cambridge University Press.